厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
総合研究報告書
てんかんの地域診療連携体制推進のためのてんかん診療拠点病院運用ガイドラインに関する研究

てんかん患者の包括的治療ケアのためのストレスおよび睡眠の量的質的状態調査とそれらの SUDEP リスクとの関係の分析

研究分担者：高木俊輔　東京医科歯科大学精神科

研究要旨 てんかん患者の包括的治療ケアのためのストレスおよび睡眠の量的質的状態調査とそれらの SUDEP リスクとの関係の分析

質問紙、睡眠日誌を用いててんかん患者のストレス、不安、睡眠状況の調査を行う。また、調査可能であったてんかん患者の発作頻度などの情報を収集し、SUDEP リスクの推定を行う。これらによりてんかん患者の心理社会的問題、随伴症状、生命予後など発作以外にありうる多種の問題点を包括的に把握し、関係を研究する。
質問紙および臨床データの解析では、拠点病院通院患者においてクリニック通院患者よりも①てんかんの重症度と不安の相関が強い、②不安、ストレスと睡眠状況の相関が弱い(=てんかんの重症度の影響が強い)という結果が得られた。

A. 研究目的

質問紙、睡眠日誌を用いててんかん患者のストレス、睡眠状況を調査する。そしてこの結果と SUDEP リスクアセスメントの相関を分析する。これらによりてんかん拠点病院で必要とされる、発作予後に限られないメンタルヘルスから生命予後に渡る包括的なアウトカムを評価するための視座を更に発展させる。

B. 研究方法

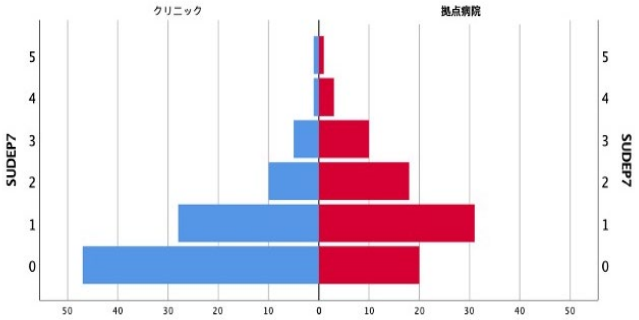
てんかん専門クリニックおよびてんかん拠点病院を複数含む病院にて通院患者に対して質問紙研究を行う。複数の病院は現在東京医科歯科大学付属病院、聖マリアンナ医科大学附属病院、沖縄赤十字病院、新宿神経クリニック、はらクリニックに協力いただけることになっており、てんかんの 2-3 次診療を十分に含む内容になっている。行う質問紙は J-SACL ストレステスト、STAI 状態-特性不安検査、ピッツバーグ睡眠質問票を使用し、これらの結果とそれぞれの症例の診療録から SUDEP のリスク評価法である SUDEP-7 の評価に必要な項目の情報を得て、これらの関係を解析する。

（倫理面への配慮）

当研究は質問紙研究であり、心的外傷に関わる質問内容はないため、被験者には侵襲はない。結果の取り扱いについては対照表を作成することで匿名化し、個人情報の保護に努める。そのため、倫理面での問題はない。

C. 研究結果

対象は全体で計 215 症例、有効回答は 196 症例だった。内訳は拠点病院 95 症例、クリニック 101 症例だった。平均年齢は拠点病院 35.8 歳、クリニック 36.4 歳と差はなかった。質問紙および臨床データの解析では、拠点病院通院患者において、SUDEP-7(下図)、STAI、J-SACL、PSQI 全てのスコアが高かった。また、拠点病院通院患者においては SUDEP-7 と他の心理社会的指標との相関はクリニック通院患者と比べてより強い傾向にあった。中でも SUDEP-7 のスコアと不安のスコアである STAI スコアの相関が強かった。さらに、STAI スコア、J-SACL スコアと PSQI スコアの相関が弱い。という結果が得られた。



D. 考察

拠点病院通院患者において、てんかんの重症度と相関するSUDEP-7が高値であったのは当然と考えられるが、その他の心理社会面および睡眠スコアも全て高値でSUDEP-7との相関が強かった。これは拠点病院患者の方がてんかんの影響をより強く受けている傾向にある結果と考えられる。

また、SUDEP-7 以外との相関ではてんかん拠点病院通院患者の方がさらに、STAI スコア、J-SACL スコアとPSQIスコアの相関が弱かった。これは、てんかん拠点病院患者が不安やストレス状況に関わらず、睡眠の状況が悪いということであり、すなわち、拠点病院患者がより純粋にてんかんという疾病により睡眠状況悪化をきたしている可能性を示唆すると考えた。

E. 結論

てんかん拠点病院通院患者においては、同疾病でクリニックに通院する患者に比べて、不安、ストレス状況など心理社会的問題に加えて、睡眠状況も悪いことが明らかになった。そして、これらは拠点病院通院患者においてより直接的にてんかんという疾病から影響を受けていることが示唆された。そのため、より重症なてんかん患者を多く扱うてんかん拠点病院では、心理社会面を含んだ包括的なてんかん医療が必要と考えられる。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし